講座日本文学

別巻

日本文学研究書目解題

日本語研究書

口語文学

別巻

全国大学国語国文学会監修

三省堂

N. D. C. 分類番号 910　　A 5 判総ページ 448

講座 日本文学 別巻

日本文学研究書目解題

定価 1800 円

昭和46年9月15日 初版発行

©

監修者　全国大学国語国文学会
代表久松潜一

発行者　株式会社 三省堂
代表者 亀井 要

東京都千代田区神田神保町1の1

発行所　株式会社 三省堂
電話東京 (293) 3441 (大代表)
振替口座東京 54300

(講座日本文学別巻)

1391-647114-2774

文学講座について

日本文学の研究は進んで来たが、これを発表するには学術雑誌の論文という形態が中心をなしている。これは自然科学の研究の場合と同様である。しかしそれをある段階で研究をまとめる意味で論文集ともなる。また学界に於ける研究の到達した水準をある段階で日本文学講座という形でまとめることも広く行われている方法である。日本文学講座としては早く新潮社日本文学講座があり、改造社の日本文学講座もあり雄山閣の國語國文学講座がある。そうして岩波書店の日本文学講座に到ってその内容も一段と高くなり、当時至り得た日本文学研究を集成し得た感があった。戦後になって日本文学講座も一、二出て、河出書房の日本文学講座、岩波書店の日本文学史講座など新しい研究が発表されたが、日本文学の研究はその後も進展してやまない。新しい資料が発掘され、各古典の本文批評も行われ、注釈書も種々現れている。それとともに文学批評や文学史研究も盛んである。

文学講座では中心になるのは文学史研究である。文学史はある意味で文学研究の綜合されたもので、文学の理論や文学批評と歴史的研究とが綜合されている。文学史は文学の史的展開であり、その点では文化史の一分野であるが、然し文学である限り、その評価の基準に於て美意識や美的理念を重んじねばならない。史的展開の叙述であると言っても事実の羅列にとどまらず、それを統一し組織づける規準がなければならないからである。

この講座では時代別に扱うのであるが、史的区分として上代、中古、中世、近世、近代という区分を行うことにな

っている。それに総論の意味で日本文学の諸問題や日本文学の周辺に関する問題を扱うことにし、更に別巻として日本文学の近代に於ける研究書を挙げて解説することになっている。研究書は明治以前にも多くあるが、明治以後は一層多くなっている。明治、大正期は文芸に関する雑誌は多くあったが、日本文学もしくは国文学の学術雑誌は少かった。明治期の「歌学」という雑誌には当時の歌学、国文学に関する論文が多く収められているが余りながくつづかなかった。それについては「國学院雑誌」「帝國文学」「藝文」など挙げるべきであろうが、後の二は国文学に限らず広く各国の文学にわたっている。國学院雑誌は今に継続しているが、大正十二年の大震災以後に「國語と國文学」が発行され、ついで「國語國文の研究」が刊行され、それ以後、国文学の雑誌も種々現れ、国語、国文学に関する論文も多く発表されるに至った。

学術雑誌に発表される論文は研究の水準を示すべきものであろう。昭和二十年以後には各大学の紀要も多く出て、一層その研究の発表も盛んになった。それにともなって国語、国文学の学会も多く設立され、それらの学会による研究発表も盛んになり、それだけ学問的に進んで来た。ただ専門はいよいよ分化され、論文も微視的研究が多くなった。精緻な論文が多いことは喜ばしいことであるが。一方で学問の全視野に於ける見通しをつけ、今日までに到達したものを統一的に集成する必要も生ずる。その集成の上で新しい創造も期待されるのである。

この「講座 日本文学」の刊行の意義もそのような点にあると信ずるのである。三省堂がこの講座を企画するに当り、全国大学国語国文学会が監修するに至ったのもその点にあるのである。

昭和四十三年九月

全国大学国語国文学会
代表　久松潜一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本書は、上代から現代までの日本文学に関する研究書のうち、明治以後に刊行されたものを採り上げ、これに解説を加えたものである。

一、研究書はきわめて多数にのぼるため、すべてを網羅することは容易ではない。ここでは編集委員が協議検討の上、主要な研究書、約千四百部を選んだ。ただし、解説中に併記したものを含めると、約二千二百部になる。

一、研究書は、だいたい昭和四十三年までに刊行されたものを採った。ただし、以前から継続して出版されていたものは、その後の刊行になるものでも便宜附加した場合がある。

一、日本文学一般・上代文学・中古文学・中世文学・近代文学の順に大別し、各項をさらにジャンルによって分類、排列した。

一、採り上げる対象は、研究書に限った。ただし、研究者の便宜を考え、おもな講座・叢書・事典等をも併載した。また、特に重要と考えられる注釈書・校本等をも解説した場合がある。なお、複製本・校本・翻刻書・注釈書・索引書などの主要なものについては、研究書解説の前に一括して、小字をもって掲げた。

一、採り上げた項目については、書名・巻冊数・編著者名・刊年・発行所を記し、次に簡単な内容解説を加え

た。解説中には関連のある研究書などについても併記した場合がある。

一、講座・叢書類の内容を示すときは、小字を用いて掲げた。

一、解説中、敬称はいっさい省略した。

一、巻末に書名索引（発音式五十音順）を添えた。ここに掲げた書名は、項目として採り上げたもの、解説の中で触れたもの、及び付記の形で載せたものである。なお、角書の付されている書名については、角書の付いた形と、それを省いた形と、いずれからも検索しうるように排列した。

一、本書の編集に関しては、五味（上代）、市古（一般及び中世）、三好（近代）の三名がその任に当たったが、編集委員として、稲岡耕二氏（上代）、秋山虔氏（中古）、原道生氏（近世）の三氏に参加していただいた。また、解説の執筆に際しては、別記の方々の御協力を得た。特に記して謝意を表する次第である。

昭和四十六年七月

五味智英
市古貞次
三好行雄

〔研究書解説執筆者〕

秋山　虔　浅井　清　阿蘇瑞枝　石井和夫
市古貞次　稲岡耕二　遠藤　宏　大島建彦
大曾根章介　奥田　勲　小野　寛　金井清一
萱沼紀子　川崎展宏　河村政敏　菊地　弘
国岡彬一　久保田　淳　後藤祥子　小町谷照彦
五味智英　坂上博一　佐藤　勝　篠原昭二
白藤礼幸　助川徳是　鈴木日出男　諏訪春雄
曾倉岑　栃木孝惟　外村南都子　中西　進
西垣勤　延広真治　登尾　豊　畑　有三
林　勉　原道生　福田秀一　冨士昭雄
藤岡武雄　堀内秀晃　堀　信夫　本田康雄
前田愛　三木紀人　三好行雄　武藤元昭
柳井滋　矢野公和　山崎馨　山田晃

目　次

日本文学一般

文学史・研究史・文学一般……三
詩　歌……一三
小説・日記・紀行・漢文学……一八
演劇・芸能……一九
伝説・童話・書誌・その他……二三
解題・書目・索引・辞典……二九
注釈・叢書……三五
講　座……四一

上代文学

上代文学一般……六一
神　話……六九
古事記……七一
日本書紀……七五
風土記……七七
祝詞・宣命……八〇
上代歌謡及び和歌一般……八一
注釈書　81　研究書　82
万葉集……八四
注釈・鑑賞批評　86　総論・概説・論

考 88　作家研究・東歌・防人歌 96
比較文学的研究 101　訓詁・語釈・表
現・修辞 102　研究史・講座 104
漢文学……二一〇

中古文学

中古文学一般……二一三
和歌……二一九
和歌一般 119　古今集 121　後撰集
以後の勅撰集 123　私撰集 125　私
家集 126　歌合 128
歌謡・朗詠……二三〇
漢文学……二三一
物語……二三五
物語一般 135　竹取物語・伊勢物語・
大和物語 138　平中物語・多武峯少将
物語・篁物語 142　宇津保物語・落窪
物語 143　源氏物語 144　狭衣物語・
浜松中納言物語・夜半の寝覚 155　堤
中納言物語・とりかへばや物語・有明の
別・浅茅が露 157
歴史物語・軍記……二五九
説話……二六二
日記……二六六
日記一般 166　土佐日記・蜻蛉日記・
和泉式部日記 167　紫式部日記・更級
日記・成尋阿闍梨母集・讃岐典侍日記 172
随筆……二七六
枕草子 176

中世文学

中世文学一般……一八三
和歌……一八九
和歌一般 189　新古今時代 191　新古今以後 197
連歌……二〇〇
歌謡……二〇五
漢詩文……二〇六
物語・草子……二〇八
歴史物語・史論……二一〇
軍記物語……二一一
説話文学……二一七
日記・紀行……二一九
随筆……二二一
法語・仏教文学……二二五
演劇・芸能……二二五

近世文学

近世文学一般……二三七
国学……二四七
漢文学……二五一
和歌……二五二
狂歌……二五六
俳諧……二五七
俳諧一般 257　貞門・談林 261　芭蕉・蕉門 261　蕪村・一茶 272
川柳……二七五
小説……二七七
小説一般 277　仮名草子 279　西鶴 280　秋成 283　後期江戸小説 285
演劇……二八九
演劇一般 289　浄瑠璃 291　歌舞伎 294　近松 298

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

近代文学

近代文学一般……三〇五
文学史・概説 305　思潮・流派・様式
研究 311　論集 319　叢書・講座・
その他 329

小説……三五四
小説一般 354　作家論 356

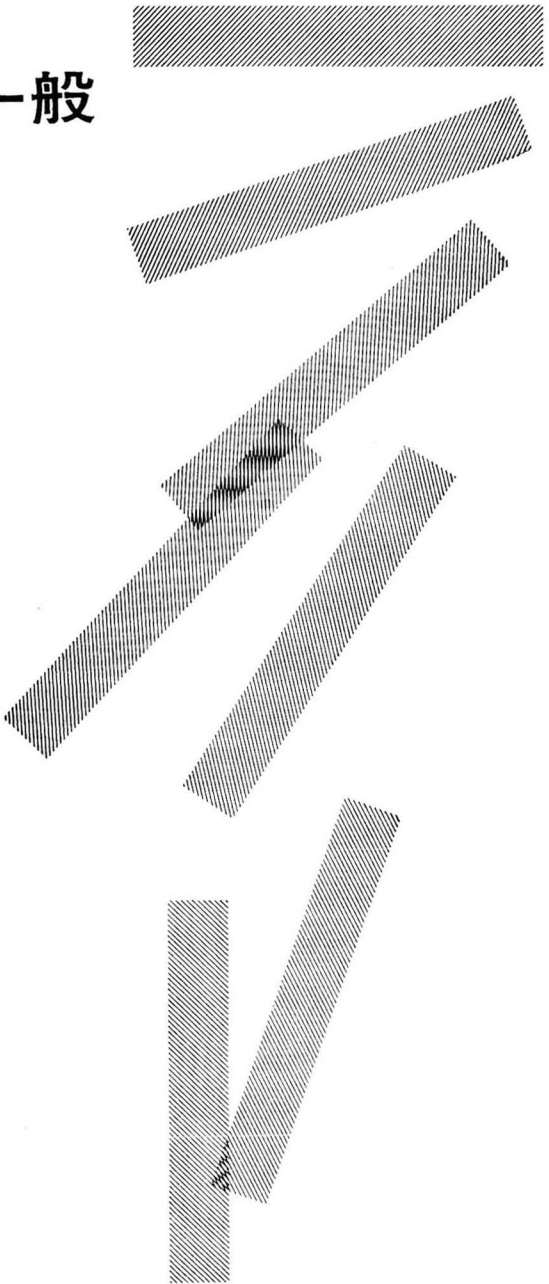
評論……三八〇
評論一般 380　作家論 382

詩歌……三八六
詩一般 386　作家論 394　短歌一般
401　作家論 405　俳句一般 409
作家論 410

演劇……四一三
演劇一般 413　作家論 414

書名索引……四一六

日本文学一般



文学史・研究史・文学一般

日本文学史 二冊　三上参次・高津鍬三郎共著　（明23　金港堂）

文学史概説の書としてはわが国最初の述作。総論として文学史及び文学の意義を論じ、第一篇「日本文学の起源及び発達」、第二篇「奈良朝の文学」、第三篇「平安朝の文学」、第四篇「鎌倉時代の文学」、第五篇「南北朝及び室町時代の文学」、第六篇「江戸時代の文学」の順序で、主要作家の略伝や文例を示しつつ文学の発達変遷を跡付けている。文学についての観念に未熟、不明確な点があるが、外国の文学史研究に触発され大きな抱負のもとに初めて書かれた文学史として記念すべき書である。

国文学史十講　芳賀矢一著　（明32　冨山房）

帝国教育会の夏期講習会（明治三十七年八月十四日～二十三日）の講述速記に加筆したもので、上古から現代文学までを平易簡潔に概観した文明史的な論述。三上・高津共著『日本文学史』（↓前項）やアストン『日本文学史』（明32）とともに、当時にあっては出色の文学史叙述であり、後出の多くの文学史書への影響も大きい。島津久基による校注本（昭14冨山房）がある。なお同じ著者に『国文学史概論』（大2文会堂）があり、これは『国文学歴代選』中の序説に基づき増補したもの。

国文学史講話　藤岡作太郎著　（明41　開成館）

冒頭の総論に「団結心と家族制」「自然の愛」の二章を置いて、文学を取り巻く周辺の諸問題を論じている。文学通史としての本書の最大の特色は、この総論に端的にうかがわれるように、時代の変遷に注意しながら、その時代の社会・風土・生活・思想など周辺との関連の中で、作品・作家をとらえようとする点である。それ以前の文学史がほとんど解題と伝記によっていたのを考えあわせると、いっそう本書の独自な特色が目立つ。総論に続いて、太古・平安朝・中世・江戸時代・明治の世、と五時期に画して論説している。後に改版が出た（大11岩波書店）。

日文文学新史　尾上八郎著　（大13　東亜堂書房）

従来の列伝的解題的な文学史叙述の定式と趣向を異にし、情中心の時代として上古・平安朝の文学を、法中心の時代として鎌倉室町時代の文学を、道中心の時代として江戸時代の文学を、主義中心の時代として明治時代の文学をそれぞれ論じている。各時代の文学は韻文と散文に、またそれらを内容と形式と両面から追求している点、異色の書というべきである。

新国文学史　五十嵐力著　（明45　早稲田大学出版部）

本書は、作品鑑賞を通して文芸学的方法によって試みられた文学史であり、その独自な方法に多くの注目が集められた。まず明治文学とそれ以前との相違特質を論じた第一篇に次いで、以下、上代・平安・鎌倉・室町・江戸と順に説き、全六篇としている。その各篇が、時代の概観を述べた第一部と、代表的な作品を詳説した第二部から成る。そのうち特に第二部における作品の鑑賞と

論評が、本書のすぐれた特色になっている。

新撰国文学通史 三冊　坂井衡平著
（大15　三星社）

古代から近代に至る通史で、個々の作家作品を発達史的に関係させて、その間の変遷、史的意味や法則を明かにすることを目的にしている。そのために図式を用いるなどして、系統的に文学史を論述しようとする点も、本書の特色の一つである。上巻は大和・飛鳥・奈良・平安時代を扱って発生・発達・美化の時代とする。中巻は鎌倉・吉野京都時代に触れて展開・分化の時代とする。下巻には江戸・東京時代を論じて、開発・革新・新様の時代としている。なお下巻巻末に「アストン氏日本文学史批評」の一文を付載している。

我が国民思想の研究 四冊（文学に現はれたる）
津田左右吉著　（大5―10　洛陽堂）

文学史を貴族文学の時代、武士文学の時代、平民文学の時代に三分し、さらにおのおのを三期に分けて、期ごとに文化の大勢、文学の概観を述べた後、各論を置く。「国民の心生活、国民の思想の最も適切な表現を文学に於いて認めることができる」として、材料を主として文学に採って、「我が国文学の上に現はれてゐる国民思想の種々相と其の変遷及び発達の径路との研究」を目的とする。本書の特色は、文学の評価の基準を平民生活の真実を反映する度合いに置いて、歴史的環境との関連の上に、長い文学史を一元的に叙述したところにある。後に全面的に改訂を施した新版が『文学に現はれたる国民思想の研究』（昭26―30岩波書店）として刊行された。また、「平民文学の時代下」は未完であったが、全集刊行の際、「文化の大勢」二篇を含む、当該の時期についての論考十一篇と、付録四篇をもって編集された。『津田左右吉全集』第四―八巻、及び別巻二―五（昭39―41岩波書店）。

日本文学史 二冊　久松潜一著
（昭27・29　弘文堂）

文学史固有の諸問題に重点が置かれた文学史で、それぞれの問題に応じて、作品史・作家史・形態史・思潮史・背景史・地盤史的見地からの論究がなされている。したがって、「万葉と古今の間」や「近代文学と古典の伝統」など、時代の過渡期や伝統の継承を論じたものが多い。古代・中世・近世・近代を九章に分けて、上下二冊とする。なお同じ著者の『**日本文学史通説**』（昭28有斐閣）は、発生と発展を重視する観点から平明に説かれた通史である。そのほかに、『日本文学史考』（昭23玄理社）、『日本文学史要説』（昭25天明社）がある。

日本文学史ノート Ⅰ・Ⅱ　折口信夫著
（昭32　中央公論社）

『折口信夫全集』（→別項）に収められなかった、著者の慶応義塾文学部における講義のノートに数人が補訂を加えたものである。Ⅰは六十六章に分かって、文学の発生・風土記・古事記・日本紀（日本書紀。著者は日本書紀という名称を誤りとする）について述べている。Ⅱは律文（詩歌）を中心としたもので、五十六章に分かって、万葉集・古代歌謡（神楽歌・風俗・朗詠・宴曲など）・古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集及び平安後期の和歌・歌人について論じている。ⅠⅡを通すと、文学の発生から平安後期までを扱っていることになり、通史としては中絶した形であるが、ユニークな方法論（Ⅱの三十五章は「国文学史の方法」である）のもとに述べられた文学史である。なお、『**日本文学啓蒙**』（昭25朝日新聞社）は、著者の日本文学史に関する講演の筆記録を整理したもので、「日本文学の本質」「江戸時代の文学」「室町時代の文学」「後期王朝の文学」「歌謡を中心とした王朝の文学」「上世日本の文学」の各章より成る。

日本文学全史 十二冊
（昭10―16　東京堂）

第一、二巻　上代文学史 二冊　佐佐木信綱

第三、四巻　平安朝文学史　二冊　五十嵐力
第五巻　鎌倉文学史　吉沢義則
第六巻　室町文学史　吉沢義則
第七―九巻　江戸文学史　三冊　高野辰之
第十、十一巻　明治文学史二冊　本間久雄
第十二巻　日本文学総論　吉沢義則
日本文学年表　高野辰之・本間久雄編

右のうち『上代文学史』『平安朝文学史』『鎌倉文学史』『室町文学史』『江戸文学史』『明治文学史』については、それぞれ別項に解説してある。

日本文学史　六冊　久松潜一編
（昭30―35　至文堂）

主として文献学的方法によりながら、広汎な範囲にわたって、各巻に一時代を割り当てながら詳説した文学史である。特に、研究の現段階を示しているところに本書の特色がみられる。各分野の専門家が分担執筆したものを編集しているが、各巻の編集者は次のとおり。上代（五味智英）、中古（池田亀鑑、改訂版では秋山虔）、中世（市古貞次）、近世（麻生磯次）、近代（吉田精一）。第六巻には「総説・年表」を収めるが、総説は久松潜一によるもので、「日本文学史の基礎的問題」以下、古代・中世・近世における文学の美の類型を論じた全四章から成る。改訂版（昭39至文堂）には、その後の新たな研究成果が補充されている。

日本文学史の研究　二冊　風巻景次郎著
（昭36　角川書店）

日本文学史の完成を志向し続けた著者の数多くの業績を集めたもの。上巻は主として和歌文学に関する次のごとき論考・著述を収める。「西行」（絶筆）「西行」（単行本として刊行のもの、↓別項）「過渡期の歌人―西行を中心にして―」「家司兼好の社会圏―徒然草創作時の兼好を彫塑する試み―」「文学の宿命―われらの師匠―」「方丈記・徒然草」「中世文芸の始発」「二代の芸匠―俊成と定家―」「近代秀歌」「定家伝と時代相―定家の実生活と歌とを関係づける一試論―」「古今と新古今との間」「紀貫之」「中世の春―千載・新古今に於ける古典の発見―」「古代短歌史の終着―藤原俊成によって把握されたもの―」「新古今集の一性質」「中世和歌の問題―前代の承け継ぎと当代の新出発―」「日本文学における和歌の位置」「山部赤人」「蘆が散る難波」「大伴乃御津」「短歌の伝統」「短歌と雖も終焉を遂げる時はある―短歌滅亡論に絡みて―」「短歌終焉論を書いた頃のこと」「沼空なき後」。下巻には古代物語と文学史に関する論考二十篇を収める。物語発生史に関する一連「氏族伝承の分解」「古代物語の成立」「物語の本質」では、古代伝承の英雄時代と物語の平安時代の間隙をうめるべく氏族制度の崩壊過程に沿って、神話が民間の伝説に分解し、あるいはそれが虚構の材として物語発生に連なる相を論ずる。「源氏物語の成立に関する試論」では、新旧両年立の矛盾や並の巻の問題を突破口に、本来「輝く日の宮」「桜人」であったところに並の巻「帚木」「玉鬘」がせり上がったと推定し、そこには源氏物語が昔物語的類型から写実的風俗物語へと発展するという観点がすえられている。「源氏物語はどうして出来たか」では中学生向きながら作品の本質が究明されている。後半には、従来の国文学研究を主体的に追跡しながら新たな文学史の構築をもくろんだ「文学史の問題（二篇）」「古典研究の歴史」「芳賀矢一と藤岡作太郎」「『日本文学における伝統と創造』の問題点」「『もののあはれ』論の史的限界」の六篇、さらに「桜桃攷」「続桜桃攷」の考証二篇が収載されている。

日本文学の歴史　十二冊
（昭42―43　角川書店）

本書は、文学の発生から現代文学に至るまでの歴史を、新しい研究の成果を踏まえながら、読み物ふうに解説論述した日本文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com